

<大賞>

◆書籍部門 『認知症 医療の限界、ケアの可能性』 (メディカ出版)

上野秀樹さん (精神科医・千葉大学特任准教授)

都立松沢病院に勤務していたときには、認知症の人を入院させて家族に感謝されることに満足していた著者が、あるきっかけから始めた新しい支援モデルを示す第1章。第2章では、専門家も混乱している診断と対応の問題点をすっきり整理してわかりやすく解説。「認知症で最も問題となるせん妄について、これほど具体的に明確に解説されたものを見たことがない」と専門家たちからも高く評価されています。第3章ではケアの本質を、第4章では国際的な視野を踏まえて「新オレンジプランよいところ、おかしなところ」など現在の日本の認知症政策を解説しています。一般の人にもわかる文体、専門家にも読みごたえのある内容で、「大賞に」と、審査委員の意見が一致しました。

「医療の限界、ケアの可能性」というタイトルは、これからの医療福祉政策にとって普遍的な思想を提起しています。



◆映像部門 NHK ETV 特集

『それはホロコーストの“リハーサル”だった～障害者虐殺 70 年目の真実』

村井晶子さん (NHK制作局文化・福祉番組部ディレクター)

600万人以上のユダヤ人を殺したナチス・ドイツによるホロコースト。その前に精神・知的障害者など20万人が殺害されていました。これに加わっていたことを2010年、ドイツ精神医学精神療法神経学会が、長年の沈黙を破って謝罪。医療の進歩を信じた医師たちが、なぜ、どのように自主的に殺人にかかわるようになったかを2015年報告書にまとめました。

遺族やドイツ精神医学会の重鎮たちをインタビューするだけでなく、当時の映像や資料交えて効果的に構成することで、視聴者を飽きさせない本質に迫る番組となっています。「やまゆり園」の事件やハイトスピーチなど、日本の問題を考えるとき、学ぶことが大きいと評価されました



◆新聞・雑誌部門 『語り継ぐハンセン病 瀬戸内3園から』

阿部光希さん、平田桂三さん (山陽新聞社編集局報道部記者)

ハンセン病回復者とその家族の多くは今も病気の過去を隠して社会で暮らしており、問題自体もまだ解決されていません。日本の医療の大きな過ちともいえる隔離政策が、なぜ、1世紀近くも続いたのか、社会の側の問題も含めて検証した7部構成の力作で、社会が教訓とすべきことを探っています。

厳しい環境の中を生き抜いてきたハンセン病回復者たちの生き様にもスポットを当てています。

「ハンセンの歴史を残すため、この連載を一人でも多くの人に知ってもらいたいと思い応募しました」という推薦者の言葉に、審査委員は共感、納得して、大賞となりました。



<優秀賞>

◇書籍部門

『破綻からの奇蹟～いま夕張市民から学ぶこと～』
(南日本ヘルスリサーチラボ)

森田洋之さん(南日本ヘルスリサーチラボ代表)

2007年、財政破綻で171床の市立総合病院がなくなってしまった夕張市、しかも高齢化率は市として日本一。そんな中、筆者は19床の診療所に赴任し、市民に健康被害が出ていないこと、笑顔で生活していることに驚きます。なぜなのか？経済学部を卒業したのちに医師になった筆者は様々なデータを駆使して、専門誌に「夕張市の高齢者1人あたりの診療費減少に対する要因分析」という論文を書き上げました。本書は、この事実を広く訴えようと、対話形式などを工夫して手作りしたものです。プロの編集者の手が入っていないため、文字が小さすぎるなど数々の欠点が目立ちますが、「日本の将来のため世に訴えたい」という熱意を買おうと、優秀作に選ばれました。



◇映像部門

『島の命を見つめて～豊島の看護師・うたさん』

武田博志さん(山陽放送報道部ディレクター)

悪質な事業者、業者を擁護した香川県によって1978年から13年間にわたり有害産業廃棄物が不法に投棄された豊島。その実態を調べに通った立命館大学経営学部の学生、小澤詠子さんが、島の人々へに恩返ししたいと看護師に。その日々を通して、都市部にも必ず訪れる超高齢社会の現実を、お年寄りたちとの温かいやりとりを通じて表現しています。全国の大学や看護学校で、医療や看護について考える教材になったことから、この作品のもつ意義がうかがわれます。



◇新聞・雑誌部門

『脳脊髄液減少症を追った11年間の報道』

渡辺暖さん(毎日新聞社会部記者)

むち打ち症や心の病などと診断された患者の中に、実はこの病気が隠れていることを、深く広く多彩に取材。2016年4月、公的な医療保険が適用されました。2005年5月に渡辺記者が右の記事を書いた当時、ほとんどの医師はこの病態を知らないか、知っていても「暴論だ」と相手にしませんでした。「怠けている」と誤解され患者も、辛い思いをしていました。渡辺記者の11年間にわたる一連の記事が、患者団体の懸命な活動と相まって、厚生労働省や医学界を動かしたことは間違いありません。厚生労働省の研究班のあるメンバーも「学会が社会貢献できるテーマがここにあるのだと渡辺記者が教えてくれた」と敬意を表しています。一過性の報道が多い中で10年を超える取材報道の力、これこそ、ジャーナリスト魂といえるでしょう。

